

研究報告 宮田小文考

鯖江市教育委員会文化課（当館学芸員） 前田清彦・藤田彩

はじめに —鯖江に生まれた畸人—

漂白の歌人として知られる西行法師（1118～1190）、西行が結んだとされる庵は全国に多数伝わっている。京都市東山区の「西行庵（図1）」は西行終焉の地として有名であり、毎年多くの観光客が訪れているが、明治26年（1893）、当時荒廃していたこの西行庵を福井県鯖江市出身の宮田小文法師が再興したということはほとんど知られていない。

願はくは 花の下にて 春死なむ
きさらぎ
 その二月の 望月のころ

西行が入寂したとされる西行庵は、西行法師の開基による天台宗寺院の金玉山双林寺の塔頭蔡華園院を基としており、西行の没後には戦乱によって荒廃するものの、時宗僧の国阿の手で再興された。その後、双林寺は寺域を縮小させながらも桜の名所として賑わいを見せた^①が、明治維新を経て双林寺が廃寺となると、西行庵の住職だった安達南徳が独立し、さらに双林寺が時宗から天台宗へ復して再興されたことで、両寺は別箇となった。

しかし、安達南徳が死去すると、主を失った西行庵は朽廃する。どこからともなく身寄りのない者が集まり、治安の悪化が懸念されたために近隣住民によって西行庵は破却されてしまった。その後、西行庵の破却を知った京都府知事榎村正直の叱責をきっかけに、残木を集めて跡地に小屋が建てられたが、それもいつしか朽ち果て、かつての旧跡は見る影もなくなっていた^②。

ここに一枚の写真がある（図2）。大正13年（1924）9月15日、京都府愛宕郡岡崎村（現在の京都市左京区）の別荘で「聚老会」の会員を撮影したもの^③である。別荘の持ち主は、

和洋紙問屋「中井商店」社長中井慈眼（三郎兵衛）^④、京都政財界の重鎮かつ明治を迎えて荒廃した京都の景観保護に尽力した人物である。

中井とともに写真に写る人物には、衆議院議員・京都府議会議員・京都市議会議員・京都市長などをつとめた政治家、京都電気鉄道の創設者・京都商工会議所会長・商店主などの実業家のほか、京都政財界で重きをなした者や文化芸術に功績のあった者など錚々たる顔ぶれが並んでいる。彼らの中には同志社英

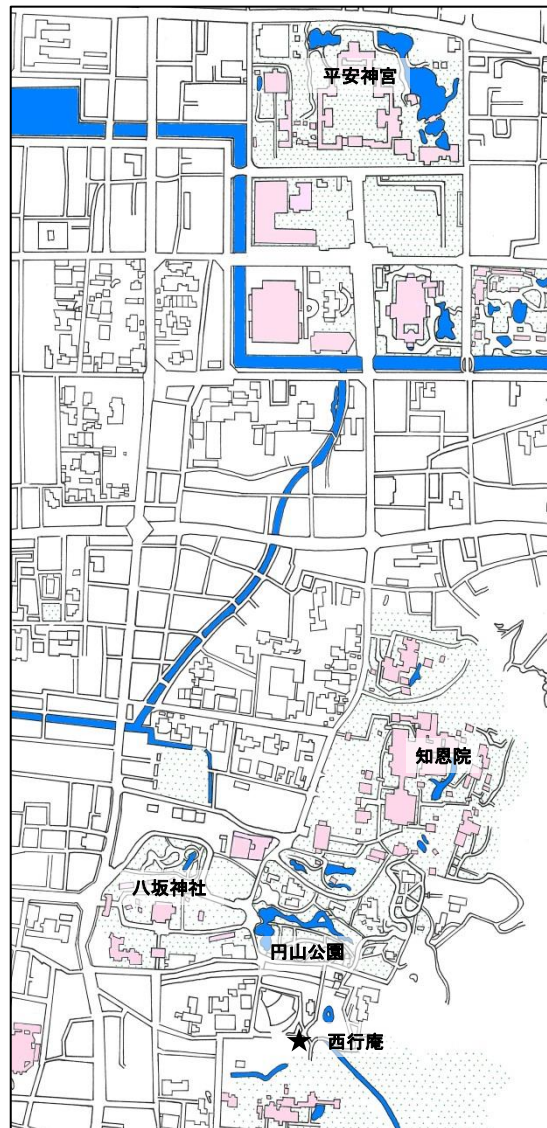


図1 円山公園周辺図（平安神宮～西行庵）



図2 聚老会（西行庵所蔵）

学校の出身者や同志社女学校・同志社大学の創設に関わった人物も多く、写真には新島襄の妻あるいは山本覚馬の妹として京都の教育を支えた新島（山本）八重子、山本の門人で新聞社や貿易会社を手がけた浜岡光哲、山本が主導した京都の復興事業に尽力した大澤善助（京都電鉄の創設）や古川吉兵衛（琵琶湖疏水の建設）らの姿もあり、この長寿を祝う会は、当時の京都の近代化に寄与した名士や文化人とその寡婦たちのサロンといえるものだったのかもしれない。

また、「聚老会」の題字を手がけたのは日本最後の文人画家と称される富岡鉄斎である。彼自身も名所・旧跡の復興に尽力しており、この写真は鉄斎と聚老会との繋がりをうかがわせる資料でもある。

さて、写真の下段中央、長い白髭を蓄え、手を組んで座る老翁が、鯖江に生まれ、京都西行庵を復興し、庵主として西行の旧跡を守った宮田小文法師である。一体、この人物は

何者なのか。どこに共通点があって、多くの政財界人・文化人とともに「聚老会」の一員として写真に納まっているのだろうか。

現在、西行庵には道服を身にまとう70歳の頃の宮田小文の古写真が残されている(図3)。決して好々爺ではない、いかにも気が強そうな、それでいて人々を包み込む優しさを内に秘めたような老人の姿がそこにある。

宮田小文に関する記録^⑥は多くはないが、彼の人物を示す言葉にたびたび「畸人」が表れることから、一風変わった人物であったことは間違いない。しかし、「畸人」とはどのような人物のことを示すのか。

『明治畸人伝』^⑥には次のように表される。畸人とは如何なる人ぞや。畸人は奇人にあらず、又所謂変人でもない。世の毀誉褒貶などは、吾關せず焉といふ風で、自ら顧みて、正しいと思ふ所に向つて直進するといふ様な人間で、兎角可愛がられない性の人である。

どうやら「畸人」は変わり者ながらも自らの信じる道を突き進み、かつ他人からも敬愛される人物、と評することができそうである。

こうした小文の性格が、京都を代表する政財界の面々との交流を生み、「西行庵」という旧跡の復興を目指す原動力となったのかもしれない。



図3 宮田小文（西行庵所蔵）

本稿では、鯖江にゆかりの宮田小文を中心に、交友関係および西行庵の再興の過程を追うことで、近代化していく京都で小文が果たした役割を検討していく。

1. 京都の近代化と宮田小文

(1) 咄珍社の創設

宮田小文は幼名を安次郎といい、嘉永五年（1852）、現在の鯖江市横越町で農業を営む山岸家に次男として誕生した。幼い頃に同地で乾物商を営む宮田家の養子となり、元治元年（1864）6月、13歳で京都烏丸姉小路の紅花問屋「小杉商店（西村屋清左衛門方）」に上がり、「文七」という名をもらって奉公を始めた⁷⁾。明治維新を迎えると、進んで丁髷を切り落とし、洋服姿で市中を闊歩していたという。加えて、当時はまだ読者の少なかった新聞を耽読して、自由民権を唱えるなど、目新しい西洋の文化に心酔していた。23歳の時には、木葉山人と称した浄土宗黒谷派西正寺の住職河合梁定の命名で「小杉商店の文七」、すなわち「小文」と称し、西京新聞社（烏丸押小路下ル）が市内に設置した投書箱にたびたび投書を行なうようになる⁸⁾。

明治12年（1879）になると、木葉山人に加え、久保田米儼（錦隣子／日本画家）・一日庵百一（水荃磐樟／神官・歌人・故実家）・木村五新堂（木村与三郎／古着商を営む。『琵琶湖疏水要誌』・『京都市例規則全書』を編集。西行庵再興時には京都市の事務掛を勤めた）・五隣堂半銭（亀屋良則／京菓子商）らの文人・滑稽家と「我楽多珍報」を発行。その二年後には「咄珍社」を創設して、小杉商店で働く傍ら、ついに自らも新聞事業を手がけるようになった⁹⁾。

同じ頃、浜岡光哲は「京都新報」（現在の京都新聞の前身）を創刊しており、小文はこの新聞社の社友となっている。こうしたことから、およそ50年後に「聚老会」として共に写真に納まる二人は、かなり早い段階から親交があったことがわかる。

同人の者たちと見識を深め、新聞投書・発行に携わる中で、小文は次第に維新政府の官僚で、後に第2代京都府知事となる榎村正直¹⁰⁾の政策への批判を強めていく。ある時は、榎村の刺殺計画を企て、またある時は不衛生を理由に京都市中の側溝に溝蓋を設けるよう進言して府庁から出頭命令を受けるなど、無謀ともいえる行動を起こして「畸人」の片鱗を見せていた。

ただし、当時の榎村政権下では産業の振興とともに教育・医療衛生・市街地の整備も進められていたため、小文の進言は叱責の対象としてではなく、むしろ良策として受け入れられた。事実、明治5年（1872）に京都府庁は木戸門を取り払い、溝蓋を設置して道路を整備するよう布告を出している。さらに翌年には雨水の排水と人車や牛馬の通行の便を図るために、木戸門撤去後の敷石も取り除かせていることから、一連の改革が小文の進言のみによるものとは言い難いとはいえ、彼の

「崎人」の一面が京都市街路の近代都市化に一役買っていたと評することができる逸話が残っている^⑩。

その後、小杉商店から暇を貰った小文は独立し、石薬師町に居を構えて呉服の小商いを始めた。しかし、商いに執心することはなく、1ヶ月の生活に必要な額を稼ぎ出すと、あとは茶・発句・都々逸などを楽しんで悠々自適な生活を送った。古巣である小杉商店とも良好な関係を維持し続けており、次第に宮田の家は洒落遊戯の仲間が常に集まる会場となっていた。

(2) 近代の京都

ここで、当時の京都がどのような状況にあったのかを概観しておく。幕末の動乱期を経て、明治新政府による政治が東京で始まり、幕府から明け渡された江戸城が天皇の住まいとなると、京都は戦争の名残と空の御所を抱えて茫然となっていた。幕末に天皇のもとを目指して終結した志士や、千年の都を守ってきた公家、彼らの生活を支えた商家は東京や大阪へ移り、広大な寺社領の大部分は官有地として接収された。長い間、京都の中心にあったものは姿を消してしまったのである。

この窮状を打開するため、明治の京都は再開発が急務となった。京都再興の町づくり政策は「京都策」と呼ばれ、大まかに見ると前述の榎村が主導した明治初年から同14年(1881)の時期を第1期、北垣国道府知事兼市長が主導した同14年から同28年までを第2期、初代京都市長内貴甚三郎が主導した同28年から大正期に至るまでを第3期として順次政策が展開していった^⑪。

宮田小文が小杉商店で奉公人としての勤めを果たしていた時期は、ちょうど第1期、新しくもたらされた欧米の先進技術が工業にと

どまらず、教育・文化などあらゆる面に広まった頃である。ゆえに小文は、新聞への投書という形で、江戸時代以前の慣例にはない新しい自己表現方法の確立を可能としたのであり、その過程で身分の尊卑や経済基盤の強弱によらない「聚老会」に至る生涯の知己を得たものと考えられる。

第2期は、独立した小文が悠々自適の風流生活を営み始める時期にあたる。この時期、小文の新聞仲間や滑稽仲間らはそれぞれに力をつけ、個々の活動を活発化させていた。

当時の京都の主要事業に商都大阪と京都間の輸送路と輸送力を獲得し、京都復興を決定的なものにするための琵琶湖疏水建設があった。この計画には小文の知己、木村五新堂こと木村与三郎も深く関わっており、この後、木村によって小文は西行庵の再興へと導かれていく。

明治21年に市制が定められ、東京・大阪・京都の3市が「特別市」として、府知事が市長の職務を兼務する形で政治が行なわれるようになると、北垣府知事は琵琶湖疏水の建設のほかにも、観光開発や教育問題に熱心に取り組み、また地元資本を積極的に育成していた。この中で北垣の援助を受けてきたのが、「聚老会」の写真に小文とともに納まる浜岡光哲・中村栄助・内貴甚三郎らの面々であり、彼らは京都公民会という政治結社に属して、北垣の政権を支える与党ともいえる存在になっていた^⑫。

明治28年(1895)には平安京遷都1100年を記念する第四回内国勸業博覧会の開催も決まり、琵琶湖疏水の完成とともに京都はかつての賑わいを取り戻しつつあった。この間に西行庵を含む円山公園は、京都における最初の本格的公園として国内外に周知され、日本が目指す西洋風の都市建設づくりプランの中

に組み込まれていたものである。すでに明治 23 年 2 月 8 日には、祇園中村楼で開催された懇談会において、北垣は市参事会員・上下京両区長・府庁幹部などに向けて将来的に東山一帯を公園化する試みを語っており^④、近代都市景観の整備という面から鑑みても、荒廃した西行庵跡地の整備計画は以前から俎上に上っていたものと考えられる。

さらに第 3 期は京都の三大事業、水利・水道・道路拡幅と軌道敷設が完成した時期にあたる。また、内貴市長のもとで一層の伝統産業の育成と文化遺産の保存が図られ、維新の変動によって破壊された古寺社などの名所・旧跡の保護が重要視された時期でもある。明治 30 年になって「古器旧物保存方」（明治 4 年布告）を引き継いだ「古寺社保存法」が公布されると、建造物・宝物類の保護が重要視されるとともに、「歴史と伝統に彩られた寺社やそれに付随する景観（風致）こそが京都として保護すべき価値あるもの」という認識が市民の中でも強まってきた。

こうした一連の京都再興計画の中で、宮田小文が深く関わるのは、ここまで見てきたとおり第二期である。

次に西行庵の再興過程を追い、円山公園および西行庵が当時の京都府や市からどのように位置付けられ、どのような役割を期待されていたのかを考えていく。

2. 西行庵再興

(1) 京都の都市整備と西行庵再興計画

明治 4 年（1871）に社寺領上知令が出されて以後、明治 6 年の地租改正条例、明治 8 年の社寺境内内外区画取調規則が順次制定され、全国の社寺が領有する林野は次々と官有地に編入されていった。数多くの寺社があった京都東山の山辺も同様で、祇園感神院は八坂神

社と改められ、隣接する諸寺とともに寺領が官有地化されたことで、一帯に広大な空地を生み出した。東山の景観は明治の幕開けとともに大きく変貌し、壮麗な社寺の庭園や老木・名木は失われ、西行庵のみならず旧寺社領の空地の管理と活用の不十分が問題に挙がってきたのである。

一方で、政府は広大な寺社領を官有地化すると同時に、明治 6 年 1 月の太政官布達 16 号をもって、各地の名所・旧跡・景勝地を「公園」として保護することを決定した。

ただし、江戸時代以前は水戸の偕楽園・白河の南湖、そして鯖江の嚮陽溪などの例外的な場所を除いては、庶民の出入りが許可された幕府や藩が整備する景勝地は基本的には存在しておらず、当時の人々にとって「公園」という言葉は馴染みのない、全くの新しい概念であった。そのため、当時の人々は「公園」に対して、「庶民が隔てなく憩える場」、つまりは公の「盛り場」という認識を強く持っていたのである。

さて、京都東山では明治 19 年 12 月 25 日、告示第 226 号をもって双林寺・長楽寺・安養寺らの境内の一部を接收して「京都円山公園」が開かれる^⑤。明治初年の寺社領の官有化によって荒廃した一帯には多くの桜が植え付けられ^⑥、再び人々を楽しませる憩いの場へと姿を変えつつあった。

さらに、同 23 年に円山公園が京都府から京都市に引き継がれると、公園の拡張は進み、江戸時代以来の茶屋や時宗寺院の庭園は京都を訪れる外国人や政府の要人をもてなすための飲食・宿泊施設へと変化していった。また、官有化によって生じた山辺の空地と存続する寺社地は巧みな空間デザインによってつながれ、「公園」化によって近代化とともに失われつつあった景観と近代化で生まれた景観との

調和が進められていったのである^⑩。

(2) 西行庵再建趣意書

明治 25 年 (1892)、平安遷都 1100 年の節目の年が眼前に迫ると、市民のうちで盛大な記念祭の挙行が計画され始め、翌年にはこの計画に京都市も加わったことで、同 28 年に平安神宮を創設することが決した。市は同時期に第四回内国勸業博覧会の誘致を決め、円山公園の北、京都東山の琵琶湖疏水が流れる岡崎一帯の近代化が進められた。

円山公園内西行庵跡地の利用計画が持ち上がったのはこうした最中の明治 26 年である。京都市参事会による西行庵再建人の公募には、府会議員・僧侶・地元の名士などの面々が手を挙げていたが、その中に一介の商人に過ぎない宮田小文がいた。彼はどのような意図、あるいはきっかけで立候補したのだろうか。宮田小文の筆による『西行庵再興記』(西行庵所蔵。以下、『再興記』とする)には再建に手を挙げた理由を次のように述べている(句読点・傍線筆者)。

予か西行庵を再興せしは、唯思ひき也といふの外なかりし(略)東山西行庵境内借地出願の旨ぞく―ある趣、日の出新聞にて見かけたり。(笑ひながら)君も運動してハ如何、予も(笑ひながら)いろ気なきにしもあらざるも、既に先望者の十四五名もありてハ到底ダメだから、望むも及ぶべからずと云捨けり。其後十四五日過ぎて市事務掛木村与三郎君(五条新町東入斜鼻教人五新堂ト云)他用ニて、面会之ため京都府へ至りし砌、談適々西行庵の事ニ及び、予も西行庵にわいろ気あり。予に彼地を許可なすれば、西行堂を再興の念ありと言しに木村氏の言うハ、私者ハ野尻君(府会副議長)のため運動して居るも、君が出願なすなら一臂を

添へん(略)

「日の出新聞」とは浜岡光哲が明治 18 年(1885)から発行していた新聞である。どうやら、小文が西行庵跡地利用に名乗りを上げたのは木村与三郎の勧めが契機であったようだ。小文は木村との話しの中で、「自分が跡地を利用するならば西行堂の再興を行う」という考えを語っており、西行庵跡地利用に際して当初から確固たる再興の意思があったかはわからないものの、西行ゆかりの旧跡がこのまま忘れ去られることに一抹の寂しさを感じていた様子がかがえる。

そもそも、京都市の公募も「東山西行庵境内借地」者を求めるものであり、「西行庵」そのものの再興を命じる強い意図は読み取れない。しかし、京都市の事務掛を勤める木村の周辺で西行の旧跡が無闇に転用されることを忍びなく感じる声が上がっていたであろうことは予想に難くなく、凶らずも小文の示した西行庵再興は、北垣政権の目指すところである名所・旧跡の保護にも一致したのである。

こうして、小文は明治 26 年 6 月 15 五日付で京都市参事会に宛てて「圓山公園地拝借願」「圓山公園西行庵内家屋建築願」を提出し、7 月 20 日付の許可を得て、9 月 30 日の再建期日に間に合わせるべく奔走していくことになった。

しかし、『再興記』にはこの時の小文の率直な気持ちも表される。

右之如く出願せしも到底六ヶ敷とひ居りしそ思ひきや、三十余日を経て(六月十五日出願、七月廿日許可)、前頭朱書之如ク許可あらしとハ。然るに予のいさゝか苦るしみしハ、予ハ達磨之再来にやあらん歎。無一物にして前後の考もなくヤツた物の、家屋新築するの策ニ苦しみ、富岡鉄斎翁(出町一条下)に西行庵再興の

代作を依頼せし〈略〉

本来、無一文かつ家屋新築の策もない状態で、西行庵再興に手を挙げたのだが、思いのほか早く参事会より許可が出て苦慮している。ついでには、日本最後の文人画家とされる富岡鉄斎に勸進文（「東山西行庵再建文」）の代書を依頼し、浄財を募ることとする、という。この勸進文（図 4）には京都府議会議員・京都市会議員・商工会議所関係者など当時の名士 33 名が名を連ねており、小文の人脈の広さが想像できるが、こうした人脈も彼の滑稽と風流を愛する生来の気性と、若い頃から携わってきた新聞事業で築き上げた人脈に基づくものだったのだろう。

さて、宮田と富岡鉄斎の接点はいかなるところにあったのだろうか。富岡鉄斎（1838～1924）は宮田の 14 歳年長である。20 歳頃に小浜藩士梅田雲浜の私塾に入って国学を学んだほか、頼三樹三郎など「安政の大獄」で刑死した人物らとも親交をもって勤皇思想を醸成した。また、歌人の大田垣蓮月尼とも交流があり、蓮月の慈善活動を身近で補佐している。余談だが、蓮月は橘曙覧とも交流しており、彼女を通して橘曙覧と富岡鉄斎は面識があった可能性がある。

その後、鉄斎が 38 歳のときに教部省に教職員の入選に関する建白書を出し、日本には固有の国土と人材があるとして、国教を興隆させるべきこと、そしてそれを教えるべき人材の育成が急務である旨を説いている。41 歳の

ときには大鳥神社（大阪府）の宮司になるが、社殿の修理の際に書画を書いて売り、その費用に充てたことが知られている。この経験が後の西行庵を初めとする、名所・旧跡の復興事業における費用捻出に活かされているのだろう。47 歳のときに神官を辞して京都に戻るが、住所は京都御所の西側、すなわち西行庵から直線距離で 4 キロの指呼の距離であった。京都での鉄斎は、西行庵だけでなく神社・寺院の再興に力を貸すことが多く、記念碑の揮毫なども、当初から現地に行き、その計画に参加して発起人のように熱心に尽力している。つまり、鉄斎は篤志家としての人物像が明瞭であり、晩年そのことを「自分は幼少の時から、聊か国家のために貢献しようと思って、聖賢の道を学び、精励刻苦したが、そのことは一向世道人心に用をなさず、却って余技として習い覚えた絵画の技が、斯く賞せらるるに至った。これは誠に慙愧に耐えぬ次第である」と回想している⁸⁾。

すでに文人画家としての地位を築いていた富岡鉄斎が、使命感と篤信をもって京都で神社や名所・旧跡の復興に尽力していたことは、西行庵再建を任された宮田小文にとって幸いしたことは間違いない。

ところで、富岡鉄斎と福井県との関係も明らかになっている。記録に残るだけでも鉄斎は安政 6 年（1859）・明治 5 年（1872）・明治 20 年・明治 33 年と 4 度に渡って福井県を訪れており、3・4 度目の来訪時に鯖江・武生の丹南地域に多くの時間を割いている。1 度目の来訪時にすでに鯖江・武生の文化人との交友関係を築いていたようだが、3・4 度目の来訪の際には宮田小文との交流も背景にあったのかもしれない。

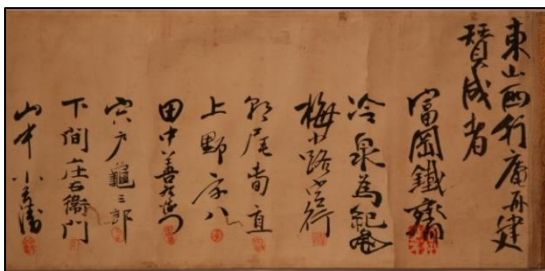


図 4 「東山西行庵再建文（部分）」（西行庵所蔵）

(3) 復活した西行庵

富岡鉄斎の協力のもと喜捨浄財を募って始まった西行庵の再興は、西行を祀る西行堂に加えて西行堂にふさわしい堂守の住居(母屋)を選定することから始まった。この工事の竣成期日は2ヶ月という短さであり、『再興記』には言葉少なに選定に苦慮したことが記録されている。しかし、何はともあれ、明治26年7月28日に陽明学者中川靖太郎の寓居鶏鳴舎(もとは大徳寺真珠庵の下庵である浄妙庵)を得ると、平安神宮建設の地鎮祭と同日の9月3日、数寄屋師平井竹次郎の手によって庵室の建築が着手された。

その後、10月に西行庵の庵主となるべく、小文は頓珍社からの知己である木葉山人こと河合梁定の弟子として得度し、名を「安次郎」から「小文」と改めた。この頃、偶然にも中川靖太郎の師である春日潜庵(久我家諸大夫)の茶室(皆如庵)を買得し、「東山公園地西行庵境内 茶室建築願」を追加出願している。この茶室、もとは豊臣家五大老の宇喜多秀家の息女が久我家へ嫁ぐ際に持参したと伝わる^⑨由緒正しき草庵風茶室であった。

11月3日、西行庵が荒廃して以降、長らく京都府庁で仮保存されていた西行の木像が新しく生まれ変わった西行庵(西行堂)に遷座する。続けて小文の入庵式、さらに圓位上人こと西行の弟子となるため、河合梁定を副師僧として正式得度式が執行され、小文は「行



図5 西行庵母屋

圓」の戒名を得た。

西行庵の庵主となってからの小文は、生涯独身を貫いたとはいえ、高台寺玉雲院に住む茶道家田中仙樵と親しんで茶道に邁進し、書画と狂歌を愛して多くの人々と交わってきた。大正11年(1921)に古希を迎えると、多くの友人が集って彼の長寿を祝い、2年後には冒頭で述べた「聚老会」の面々と佳会を催している。

小文は生来の胆力とユーモアで政財界・文化界で名を挙げた人々や祇園の芸妓たちと親しく交わってきたが、円山公園を訪れ、西行庵に立ち寄って1杯の茶の振る舞いを受けた多くの人々もまた、彼の人柄に魅了されたのだろう。荒れ放題だった西行庵は、小文の手によって再び名所として生まれ変わり、京都の賑わいに彩りを加えたのである。

おわりに 一終焉一

昭和4年(1929)秋、77歳になった小文が西行庵の屋根に積もった落ち葉の掃除をしていたところ、そのまま昏倒。親族のほか友人知人が懸命に彼の看護をしたが、10月12日に夢現に次の歌を口ずさみ^⑩、翌日永眠した。

如月の 花の下より 鼻のした
餅つきまでと 思ひしものを
もみぢ葉の 照るをも待たで
チリテッ頓 テトシャンシャンと
西へ行き候

最期も洒落と滑稽で終わった、小文らしい生き方であった。

小文亡き後の西行庵は、遺言にしたがって生前親交のあった京都史蹟会へと寄附されている。彼自身はこの会の会員ではなかったが、時々参会して幹部らとも心安い関係を築いていたようだ。富岡鉄斎も「京都史蹟会有志名簿」(京都府立総合資料館所蔵)に名を連ねて

いることを鑑みても、彼らはこの会でも度々顔を合わせていた仲だったのかもしれない。

西行庵の再興が小文の手によって行なわれたことが意味するところは、単に失われた旧跡を復興したということにとどまらない。小文の手ではなく、寺院によって西行庵が再興されたならば、政府が理想とする「公園」に必要な公共性を十分に得られなかっただろう。そもそも、先に述べたとおり、西行庵跡地利用の公募が出された時点では、「西行庵」としての再興が適わない可能性もあったのである。

しかし、小文の「思いつき」である西行庵の再興計画は、歴史観光都市としてのまちづくりを進める京都府や京都市の方針と見事に合致した。有職故実に通じ、滑稽を巧みにして風流を愛した小文の人柄を得たからこそ、本来、寺院の一角であった西行庵に公共性を生み出すことが可能になったのだといえる。

幕末維新によって荒廃した京都。その再興の裏には、千年の都が歴史観光都市として再出発するための一翼となった鯖江出身の一介の商人の姿があったのである。



図6 宮田小文墓石（横越町）

本稿は平成21年（2009）、福井県茶の湯同好会が京都東山の西行庵を訪れた際、西行庵から宮田小文と鯖江との関係について御教示を受けたことが発端となっている。その後、同会と鯖江市教育委員会が調査を進める中で、小文の墓石（図6）が鯖江市横越町共同墓地に現存することが判明し、同町覚善寺の『過去帳』に記載があることも確認された。さらに聞き取りによって山岸家と宮田家との関連も確認され、宮田小文が鯖江市横越町出身であることが資料からも裏付けられた。

本稿執筆にあたり、西行庵・福井県茶の湯同好会会長師田一郎氏・同会岩原正吉氏に御協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。



宮田小文を偲ぶ法要（横越町）
〔平成22年10月14日〕



西行庵訪問〔平成22年11月24日〕

- ① 双林寺は京都市円山公園にある天台宗の寺。桓武天皇の勅願により、最澄が創建したと伝えられる。沙羅双樹林寺と称し、後に鳥羽天皇の皇女綾雲女王が入寺した。西行・頼阿・平康頼らが隠棲したが、中世の戦火によって堂塔が荒廃、その後、時宗の僧国阿が入寺して再興し、以後、花の寺として賑わいを得た。
- ② 前掲、牧野宗翠『西行庵明治再興伝来記』
- ③ アルバム仕立てとなっており、次頁以降には「御不参加ノ御方」と題して、聚老会会員を紹介する。その中には、初代京都市長となった内貴甚三郎、衆議院議員の上野彌一郎、第一回内国産業博覧会で「京都をどり」を創設した日本舞踊井上流家元の井上八千代（片山春子）らの名前が挙がる。
- ④ 実業界で重きをなし、京都市議員・府会議員もつとめた。
「聚老会」写真、上段右から4人目。
- ⑤ 博文館編『明治畸人伝』文芸倶楽部定期増刊第12巻第6号（博文堂、明治39年）
小西大東「西行庵主小文法師の事ども」（中神直三郎編『技芸倶楽部』11月号、昭和4年）
なお、小西大東については、松田万智子「小西大東 - 忘れられた近代京都の文化人 -」（『資料館紀要』28、平成12年、京都府立総合資料館）に詳しい。
藤澤文二郎『畸人小文』（財団法人京都史蹟会、昭和5年）
井口海仙人「小文法師」（『淡交』第14巻第12号、淡交社、昭和35年11月号）
牧野宗翠『西行庵明治再興伝来記』（西行庵、昭和50年）
- ⑥ 藤澤文二郎『畸人小文』（京都史蹟会、昭和5年）
- ⑦ 前掲、博文館編『明治畸人伝』
ただし、前掲の藤澤文二郎『畸人小文』・小西大東「西行庵主小文法師の事ども」では文久2年に奉公に上がったとされている。
- ⑧ 前掲、博文館編『明治畸人伝』
- ⑨ 前掲、小西大東「西行庵主小文法師の事ども」
福井純子「京都滑稽家列伝」（『立命館 言語文化研究』9巻5・6合併号、平成10年）
- ⑩ 旧山口藩士。明治元年より維新政府の官僚として京都に出仕した後、明治10年より京都府知事として四年間在職。東京遷都後の京都の復興のため、勸業政策を推進した。
- ⑪ 京都市『京都の歴史 8 古都の近代』（京都市史編さん所、昭和50年）
- ⑫ 前掲、京都市『京都の歴史 八 古都の近代』
- ⑬ 塵芥研究会『北垣国道日記「塵芥」』（思文閣出版、平成22年）
- ⑭ 前掲、塵芥研究会『北垣国道日記「塵芥」』
- ⑮ 京都市『史料 京都の歴史 東山区』（平凡社、昭和62年）
告示第貳百貳拾六号 十二月廿五日
京都府下京区第十五組円山町官有地字円山、
同町長楽寺・安養寺・弁天堂境内、同組祇園

- 町官有地字真葛ヶ原、并同区第廿二組鷺尾町官有地字双林寺境内ヲ以京都円山公園地トス。
- ⑯ 右同
桜樹植栽 円山の遊宴場にては前に多くの桜を植えつけしが、今度また廻り一尺より一尺五六寸計りの桜数百本を植込み、花下遊飲の美観を添ゆるよし。
- ⑰ 出村嘉史・川崎雅史「近代京都の円山公園における景観構成の分析」（『土木学会論文集』744、93 - 100、平成15年10月）
- ⑱ 青木勝三『文人書譜 12 鉄斎』（淡交社、昭和54年）
- ⑲ この伝承の論証については、西行庵ホームページ「西行庵の歴史・宗旨（宇喜多家に伝わる伝承）」に詳しい。
- ⑳ 前掲、小西大東「西行庵主小文法師の事ども」